

## 序

### 西村久蔵における義なる愛

宮崎 豊文

先生の性格は、その父と母とから、両者のよい処ばかりを継承して構成されていた。父君の謹直な几帳面さと、母堂の温かな思いやりの心がそれである。更に先生の信仰は、高倉徳太郎と小野村林蔵の二人の恩師から受け継がれ、それが先生の三十八年に亘（わた）る信仰生活の骨格をなしていると信ずる。即ち高倉ほどファンダメンタル（基本的）という言葉を口にした神学者はなく、小野村はどパイティ（敬虔（けいけん））という言葉を好んで用いた牧師はなかった。我々はわが西村久蔵において、両者の神学的なるものと、敬虔なるものとの混血児を見る思いがする。

これを一言で掩（おさ）えば、先生の信仰と生活の中核をなすものは、終始「義なる愛」であつたと申して過言ではないであらう。その発端は、先生十八歳の青春の頃、始めて一夜、高倉の話を聞き、十字架の愛に触発されて、寝もやらず、パスカルの深夜の体験にも似た回心を迫られ、その翌々日の聖日に受洗したという。十字架の義なる愛に感泣した青年西村の姿を髣髴（ほうふつ）せしめられるではないか。

更に我々は「伝道は人なり」の感を深うする。先生は言葉のみの人ではなかつた。義なる愛の実践者であつ

た。彼は右の手のなすところを左の手に知らさず、幾夜涙をもつて悲しめる者に慰めの手紙を認め、乏しき者に金品を贈つて之を力づけたこと幾度ならんか。彼は口先だけの儀礼的な御挨拶はうそこにも言える人ではなかつ

た。マクルーハンは「伝達媒介そのものがメッセージである」と主張する。余は媒介によるメッセージというよ

りもむしろ媒介そのものがメッセージだと信ずる。その意味で伝道は人なのである。言（ことば）肉体となりて我らのうちに宿るといふ言の受肉の原理は、また我々の証（あかし）にも適応さるべきである。わが西村久蔵の一挙手一投足がメッセージそのものであつた。ここに信仰と倫理の一体感が存するのである。

一九八〇年七月